

# 湘南学園だより

No.115

発行 園り部  
湘南学園だより  
編集 集

## 新たな一ページひらいた湘南学園第一回全学教研

学園長 仲本正夫

八月三〇日、幼小中高のほぼ全教員一〇六名（PTAからの役員三名を含む）が参加して、学園始まって以来の第一回全学教育研究集会在開かれ、幼・小・中高各パートから5本の実践が発表されました。

実践報告は、どれもこどもたちに対する人間的なあたたかい働きかけを通して、わかるよるこびやできたという達成感を与え、自立をうながしていくもので、湘南学園の教育の素晴らしさを改めて実感することができました。

また、同時に行われた通信交流は、先生方が時間をかけ身を削るようにして発行している通信をB4版一枚にまとめて発表交流しようというものでした。幼小中高全体で学級通信・学年通信・教科通信四九種類がまとめられ、参加者に手渡されましたが、はじめて見る通信もあり、ワクワクしながら拝見しました。湘南学園の旺盛な教育活動を如実に示すものだと思います。

第一回教研に対するびっしりと書かれた感想は、「幼小中高しっかりとつながっていたことが実感できた」「幼」「中学に上がる前に、より確かな基礎力と学習習慣を身につけられるようにしたい」「小」「小学校はなんて豊かな実践をしているのか」「中」「同じ教員室の同じ教科の先生が、こんなに生徒に寄り添い、科学的・具体的な指導をしていることを今日はじめて知った」「高」など実践報告に対する感動や共感で綴られていました。また、湘南学園が総合学園として、人間性豊かな教育実践を通して、各パートが理解しあい、ひとつになることをじつは多くの参加者が切実に求めているということが熱くひしひしと伝わってきた教研にもなりました。

教研成功のためにご努力いただいたレポーター・司会者そして参加者のみなさん心からお礼申し上げます。



## 学園はついで——第二回全学教研開催

八月三十日という新学期準備で多忙な中、中高ホールを会場に、幼稚園、小学校、中学校高等学校各パートの専任教員が一同に会して、湘南学園第一回全学教研が開催されました。

湘南学園では従来もパートごとに、旺盛な教育活動を行ってききましたが、パート間での交流と連携が必ずしも充分ではないとの指摘が保護者からもされてきました。

総合学園である以上その良さが教育実践内容にも生かしていくことが求められています。その意味で今回このような取り組みが行われたことは、パートをこえて、学園にとつての大きな一歩であると評価しています。

### 各報告の概要

当日は幼稚園から一本、小学校から二本、そして中学校高等学校から二本と、あわせて五つの意欲的な実践報告が行われました。金馬国晴横浜国立大学准教授、仲本学園長のお二人に共同研究者として参加いただき、半日間に渡って活発な質疑応答を行いました。以下簡単に五人の先生方の報告内容をご紹介します。

なお今回の共通テーマは「学習意欲」でした。

#### 幼稚園

「意欲を高める保育とは」  
—心のよりどころとなる保育とは—

報告者 年少組担任

稲川 仁美先生

#### 小学校

「比を使って大仏の顔の大きさを求める」

—修学旅行の体験を豊かな学びにつなぐ—

報告者 六年いすず組担任

西 真由子先生

「スタートした小学校新校舎でのICT機器を使った教育づくり」

—高まるこどもたちの学習意欲—

報告者 メディアセンター担当

前川 貴宏先生

#### 中学校高等学校

「教科指導を通して中学二年生の学習意欲を育てる」

報告者 中高数学科

里吉 正先生

「高等学校三年生 英語の指導について」

—学習意欲を育てる—

報告者 中高英語科

木下 貴志先生

各報告の概要は次の通りです。(報告者の敬称は略させていただきます。)

幼稚園では夏休み期間中に全員がテーマに沿ったリポートを作成、研究会を実施しました。その中から選ばれたのが稲川リポートです。三歳児の実践では「いねいに共感的に、園児の心に寄り添いながら、「安定した心の土壌を満たしてあげることが、この時期なによりも大切なこと」と具体的に報告されました。四歳児、五歳児の実践では「忍者遊び」などを通じた豊かな遊びの世界の中で、子どもたちの自発性を育てる実践。また友達との関わりを大切にしながら、生活の中で園児が発見した事柄の中から探究心を育てる実践が語られました。



小学校西リポートでは、三泊四日の京都奈良修学旅行の体験をもとに、国語、社会、そして算数の教科学習と結び付け、「豊かな学力」という小学校の教育課題に迫ろうとした実践報告でした。算数の「比」の学習として「奈良の大仏」の顔の大きさを、グループの共同学習で求め、実物大の顔を模造紙で表しました。

子どもたちの意欲を高める「学びあい」の教育の在り方を追及し、また総合学習の視点を大切にしたい、湘南学園小学校らしい取り組みでした。

前川リポートは小学校メディアセンターの立ち上げの中心になって取り組んできた経験をもとに報告したものです。

小学校ではすでに一年生からメディアの授業では全員がPCを使って学んでいます。メディアセンタースタッフの援助を受けながら、電子黒板を活用した授業実践は、予想より早く定着しつつあります。「ICT機器の導入で何かが劇的にかわるわけではない。しかしICT機器を利用して、教師が楽しみながら授業をすることで、学習意欲は高まる。」ことを具体的な例をあげ、実際にICTを活用したプレゼンテーションで示しました。

中学校里吉リポートでは「基本

は授業です。自信を持って授業をするためにはしっかりとした教材研究と、生徒との信頼関係が大切」とまず「文字式の計算」を例に生徒の興味関心を高める工夫のある授業を紹介しました。

続いて定期試験の結果を分析し、課題のある生徒を、小グループにわけて生徒の理解に応じた教材を用意し、学力補充に取り組みだティームティ칭ングの取り組みを発表しました。朝の時間を活用した粘り強い努力を示した報告でした。

高等学校木下リポートは難関大学、上位大学での出題が多くなる傾向にある「自由英作文（小論文）、内容要約」の指導をめぐっての取り組みが、報告の中心となりました。英語学習の中でもとりわけ難しい課題である「自由作文」という課題について、一人ひとりの課題が何か、ということを確認にして、極めて具体的に、ていねいに指導した報告でした。「大学入試で問うのは論理とはどういうものなのかを理解しているか」「なぜ学ぶのか、それはより良く生きる力を養うため」と視点を明確にした実践の報告でした。

**全学教研に参加して**

今回の教研では、参加していただいた先生方一人ひとりから感想

をいただきました。その中のごく一部ではありますが、ご紹介させていただきます。

**五本の実践報告に感動するばかり**

貴重な時間を過ごすことができたとように思います。全体を通して、5名のレポーターの方の実践報告を伺いながら感動することはかりでした。それは、他パートの取り組みの実践を知ることができたからです。それ以上に、先生方の子どもたちへの熱意を本当にひしと感じることができたからです。

普段知ることの出来ない小学校の先生方、中高の先生方の教育への熱意には感嘆と感動の連続でした。今回全学教研を通して、改めて幼小中高のつながりの大切さ、そしてそれらの取り組みを知ることので一丸となつて進むことができるといふ情報交換の大切さを感じました。今後も学園の教員の一人として、熱意を持って保育に取り組んでいきたいと考えています。

(幼A)

**小学生がどこまで学力をつけなければならぬのか改めて実感した**

本学園で学園生活を送っている三歳から十八歳までの一人の人間が成長する道標がよく分かった研修でした。幼稚園の稲川先生の報

告は日々の生活の中での小さな発見と変化を見逃すことなく、保育に取り組んでいる様子が伝わってきました。小学校の西先生と前川先生の報告からは、児童の次の授業への期待感が高まっている様子が伝わってきました。小さな達成感がひとつひとつ積み重なることが、児童の意欲となるのでしよう。

中高の里吉先生の報告の中の基礎学力のためには興味ぶかく拝聴した。小学生がどこまで学力をつけなければならぬのかを改めて実感した。木下先生の報告は英語科だけにとらわれない人と人とがつながる深い内容だったと思います。

(小B)

**子ども達の持つ力を引き出せる関わりを、どうしていくのか、課題も見えてきた**

どの先生も目の前にいる子ども達にとって何が必要なのかを考え関わられていることに感動しました。その上で金馬先生の講評にもあったように、楽しい知的好奇心をどう持たせていくか、それは子ども達がどう生きていくかということにつながっていくのではないかと思います。ともすれば難関校を突破することが注目されがちですが、大学の課題でもある「自分が何をして生きていくのか」とい

うことを考える関わりも必要だと改めて痛感しました。

(中J)

**学園（総合学園である湘南学園）にとっても歴史的な日だった**

自分の身近な湘南学園の中にも今まで知らなかった優れた実践があることに気づき、それをとつてもうれしく思います。今日は学園名とつても歴史的な日だったと思います。実はパートを超えた取り組みを知っただけでなく、同じ教員室内の同じ教科の先生がこんな生徒達に寄り添ってそして科学的・具体的な指導をされていることを今日始めて知りました。僕も初心に帰って科学的な指導を模索してガンバリョーと思いました。

(高C)

※いずれの文も紙面の都合で一部割愛させていただきます。



(文責 小 斉木)

## 第3回松ぼっくりフォーラム 鈴木健次氏講演会開催される

夏休みを間近に控えた7月2日(土)に、第3回松ぼっくりフォーラムが開催されました。この企画は、湘南学園同窓会が、とりわけ湘南学園の在校生に向けて、社会でご活躍されている著名な卒業生を講師として招き、講演会を行うというものです。昨年は同窓会に加えて湘南学園、PTA、後援会が一体となり「チーム湘南学園」として森ビル社長・森稔氏の講演会を開催することができましたが、今年も「チーム湘南学園」の取り組みとして準備され開催されました。

今回講師としてお招きしたのが、森稔氏と同じく湘南学園中学校第一期卒業生であり、大正大学名誉教授、元NHKディレクターの鈴木健次氏です。鈴木先生の豊富なご経験をもとに、中学1年〜高校2年の約900名の生徒に対して「特別授業」としてご講演してもらうこととなったのです。

テーマは『複眼的思考のすすめ』・・・ちょっと難しそうなテーマですが、「いろいろな立場・視点

から物事を見たり考えたりすること」の大切さについて生徒諸君に考



えてもらうことを内容としました。

講演会の冒頭に、中高校長山田先生より今回の企画の趣旨が話され、同時に鈴木先生の紹介が行われました。大きな拍手の中で登壇された鈴木先生は、まず、ご自身が湘南学園の中学生であった頃の話をされました。学年1クラスの小さな学校だったが、自由でのびのびとした素

敵な学校だったそうです。その後本題に入りましたが、まずは、プロ野球日本ハム球団の斎藤佑樹投手の初先発の結果に対して、2つの新聞が全く異なった評価を下していたことを紹介し、取材している目、編集者の考えのもとに番組や報道が作られていることに気付いて欲しいと呼びかけました。また、受けとる側の第一印象や先入観によって、事実がゆがめられかねないということを知る必要についても強調されました。現代のように「情報が有力な力の源泉となっている時代」「情報化社会」では、貧しい人でも努力すれば情報を得ることができると、一方、権力者にとっては自分の支配を揺るがしかねないという脅威があり、権力の側から情報をコントロールする傾向が強いと話された後、「報道の裏側をある程度知った上で情報を上手に使うこと」、「見えているだけではダメで、複眼で得られた情報を分析して考えること」の大切さを話されました。ウォーターゲート事件やロッキード事件、さらには原発事故にまで言及されながら、じっくりと真実を見極めて欲しいと話をまとめられました。

その後の質問の中で、「たくさん情報がある中で、どうすれば正しいものを取り入れることができる

か」、さらには「NHKに入るようになった経緯は？」といったものまで出されましたが、鈴木先生にはとても丁寧にご答えていただきました。最後に仲本学園長から鈴木先生への謝辞と生徒へのメッセージが伝えられて講演会は終了となりました。

今回の講演会を準備した80周年実行委員会は、今回の講演会は中学1年から高校2年までの幅広い年齢の生徒、理解力に大きな差がある生徒を対象とするだけに、特に中学生1年・2年の生徒たちには「難しく理解できないものになるのではないか」と危惧することもありましたが、鈴木先生の軽快な話し方とユニモアあふれる内容に、生徒諸君の感想も非常に積極的・前向きなものが多かったと思います。「複眼的な思考」ということを、様々な情報を受けとる際にも、そして身近な人間関係を考える際にも活かしていきたいというような感想が少なからずあり、今回の講演の重要な成果であったと思います。

ここに幾つかの生徒の感想をご紹介します。

・分かりやすくしておもしろかったです。人間は変わるという言葉が心に残った。私も気が弱いから、すごくその言葉がひびきました。やっぱり人間は、先入観、第一印象で決めているんじゃないから、複眼的思考で見ることは、すごいいいなと思いました。

鈴木先生がいった言葉は、私の心に今も残っています。長年の経験を話していただいて、未来にやくだてていけたらいいなと思いました。  
(中1女子)

・私は今回の講演会を聞いていてものごとをいろいろな面から見ること大切なんだなあと感じました。例えば斎藤投手。私だったらきっとだめだったことを記事にすることを思います。でも、他の記事にはもつと違う視点から見た斎藤投手がのっていた。こうやって物事をいろいろな視点から見ると自分の考え方だけでなく、他の人はどう感じているのかもわかりました。進路のことについても、質問の答えを聞いていて、今からあせって夢を決めなくても大学に入っておいしい物に決まってしまうくらい軽くてもいいのかなと思いました。周りの友達ももう夢や行きたい大学などを決めていて、でも自分にはなにも

からなくて不安ですごくこわかったです。でも鈴木先生の話を聞いてすごく安心できました。(中2女子)



・今回の講演は自分の今までの思考に新しい考えを与えてくれました。様々な視点から世界を見ることが、新しい世界が見えてくるということ、勉強でも部活でも人間関係でも新しい可能性を開いてくれるそうです。鈴木先生はとてもユーモアのある方でとても楽しく講演を聞くことができました。ありがとうございました。  
(中3男子)

・私は今回の講演を聞いて、1つ自分を変えてみようかなと思いました。それは今回のテーマでもありませんが、複眼的に、多くの視点から相

手を見てみるようにしよう！ということなんです。私は周りの人を第一印象でこういう人だ！と決めつけて接してしまうことがあるのです。だけど色々な視点から見れば、相手のいい所も沢山見つけられて友達増えるかなって思います。なかなか難しいことではあると思います。だけど、大切なことだと思うので努力しようと思いました。鈴木先生がおっしゃっていたように、人はそれぞれのペースで大人に変わっていくのだから、私も思います。だから、人をばつと見で決めつけないで大きく視野を広くして見ることができるとなりたいと思っています。  
(高1女子)



・今日は貴重なお話ありがとうございました。複眼的にもものを見ないとかん違いがおこってしまった、納得のいかない結果になってしまったことがあるということがよくわかりました。鈴木先生はさすがにお話しするのが上手で、普通にお話とかしたらもっと楽しそうだなと思いました。フケとうな重で自分の職業が決まったということにはびっくりしましたが、人生には色々なことがおこるのですね。私もまだ将来の職業の展望は無いのですが、どんなことが人生でおこっても良いように、それまに色々な経験を積んで、複眼的にもものを見る、ということをしなくてもできるようになれたらいいです。  
(高2女子)

生徒たちに、生きる上でのたくさんヒントを与えてくださいました鈴木先生に、あらためて感謝するとともに、今後も学園に通う子ども達に、確かな学力と広い視野を持ち、豊かな経験を積み、雄々しく社会に巣立っていきけるよう、「チーム湘南学園」が努力することをお伝えしたいと思います。

〔中高 山口吉英〕

# こどもたちの輝き

年少組担任 藤田さつき

桜の咲く四月、初めての集団生活に大きな不安と緊張を抱えながら、保護者の方と一緒に門をくぐったこどもたち。表情も硬く、体もコチコチ。一度足が止まると、そこから歩進むのには時間がかかることも・・・そんな体と心をとまほぐしていかれるよう、四月はスキンシップをとり、私と先生という、一対一の関わりを大切に、保育者に親しみと安心感を持つるようにしていきました。

また、園での楽しいこと・興味を持つるものをこどもたちと一緒に見つけていけるように、「人ひとりのこどもの気持ちを受け止め、一緒にひとつのことを感じ、身近な存在になれるように働き掛けていきました。



自分のやりたいものが見つかったくると、こどもたちの目は輝きを増し、生き生きと生きてきます。

特に、自分たちの手によって様々な形を変えていかれる砂場は、こどもたちにとつて魅力的な環境のひとつです。ここではまた、保育者がこどもたちの気持ちを惹きつけるべく工夫をしていきます。

四月の砂場は、すぐに遊具を手にとつて遊び始める子もいれば、遊具を片手に、保育者や友達がしていることをジッと眺めている子など、その姿は様々です。子ども同士、となりに居合わせても、そこにはあまり会話はみられません。楽しそうな大人の模倣をみながらあそび始めるこどもたちです。そこで、保育者自身が裸足になつて砂や水の感触を味わい、感じたことを言葉にしたり、「どろだんごをつくつてベンチに並べて」「いらっしやいませ」・・・そんな姿をみせていきながら、「ほくもー」「わたしもー」「やってみたいな！」という気持ちを引き出していけるような楽しい雰囲気をつくっていきます。

ある日、大きな穴を掘つて、「ここに水を運んでいれてみようかな。」と眩くように話をしました。この一言に、こどもたちの気持ちにエンジンがかかりました。何度も何度もバケツで水を運んで、穴

の中に水がどんとどんとたまつていくことを楽しんでいきます。そして、裸足になつて足を水の中に入れてみたり、体ごとどろんこになっていきながら、砂や水の感触を味わっていたこどもたちでした。

今度は、バケツの他に、大きなたらいを用意して、「水運びたいんだけれど、とっても重たいの。誰か力を貸してくれるお友達いるかしら。」と話をすると、「ほくもー」といわんばかりに、男の子も女の子も快く力を貸してくれました。「ワッショイ！ワッショイ！」

運びながら元気な掛け声もつけていきました。そんな楽しそうな声を聞きつけて、周りにいたこどもたちも仲間に加わってきます。そのうちに、保育者が加わらなくてもこどもたちが一緒にいる子はまだ名前も知らないお友達。

「○○○ちゃん、ありがとう！」  
「○○○くん、力持ちだね」  
保育者が一人ひとりの名前を声にだして呼ぶことで、○○○ちゃんという名前のお友達がいるんだな・・・と、友達への興味を広げていくきっかけにもなつていきます。

それ以上に、こどもたちは自分の名前を呼んでもらえることがとても心地よいのです。一日の中でたくさんたくさん子ども達の名前を声にして、笑顔で心を通わせる時(場)を、意識して心掛けています。



またある日は、タイヤの階段を三段つめた大きな大きな砂山をつくっておきました。もも広場と称した砂場の変化に子ども達の魅力は更に膨らみます。

「ヤッホー！」

山のでっぺんで声がします。こどもたちは何度も登っては降り、そのうち登った山の上からジャンプをしたりと、繰り返し繰り返し楽しんでいました。ワクワクと楽しい時間の中で、本来こどもたちも持っている、もつともつとやりたいという気持ちも様々な場面で引き出していきながら、次の日の原動力へとつなげていきます。



入園当初のこどもたちの重たかった足取りは、日に日に自ら前へと進んでいけるようになっていきました。

そして、リズムのある繰り返し生活の中で、降園時間になったら、大好きなお家の方が迎えに来てくれるということを知ったこどもたちは、安心して幼稚園生活の中での楽しみを見つけていけるようになっていきました。

そんなこどもたちも一学期を終えるころには、お友達と片言の言葉を交し合ったり、先生やクラスの友達と一緒にダンスを踊ったり、手遊びをしたり、絵本を見る時間を楽しみにしたりする姿がみられるようになっていきました。朝・帰りの支度を自分で行うおとする気持ちも大きくなってきています。

そんな一人ひとりの心の成長には、目を見張るものがあります。



集団生活のスタートである幼稚園の生活が、こどもたちにとって安心した生き生きとしたものになるように・・・。

そして、こどもたちの目が、いつもいつも輝いていられるようにと、願っています。

そう願いながらも、こどもたちから一番、元気という大きな力を常にもらっているのは、私たち、保育者なのかもしれないですね。こどもたちの計り知れぬ力をたくさん発見できる毎日に感謝をしながら、保育を進めていきたいと思えます。



## 夏の西校舎リニューアル工事

小学校教頭 鈴木 努

今年四月には、小学校メディアセンターや教室棟が完成しました。現在は、改築二期工事に入り、来年の八月に体育館・屋上プール・音楽室・図工室・児童用玄関などの完成を目指しています。

この夏休みには、西校舎のリニューアル工事が行われました。(IT関連や付帯工事は、来夏となります。)

小学校校舎改築については、着工前の約三年前から教職員を中心に研究・研修が進められ、保護者や児童の意見なども取り入れ、検討してまいりました。特に西校舎については、どのようにするか。建て替えるのか、または、そのまま利用するのか。専門家も交えながら論議を進めました。

建設全体のコンセプトとしては、児童が学習しやすい環境・地域や近隣に対しての配慮・工期の短縮やコストの削減なども含め、様々な視点から話し合われました。特に近隣に対しては十分な配慮をもとに対話を中心に進めました。

2F 教室



1F 教室



その後も、くり返し検討がなされ、細部にわたって議論が行われました。

結果的には、西校舎については、既存の躯体を残し、内外装ともにリニューアルすることになりました。

教室は、新校舎とまるで同じというわけにはいきませんが、なるべく同じ仕様のものに近づけています。

教室廊下側の半オープンなつくりや先生コーナーなど、見た目も新校舎教室とは、遜色のないものとなりました。また、二階には、旧校長室や旧会議室、旧コンピュータ室を取り払い、オープンスペースとなり、一階は、旧玄関と周辺域を一体化させたプレイルームとなっています。それぞれのスペースは、クラス集会や学年集会、音楽の授業など、今後様々な広がりのある活動空間となります。今後、教室やオープンスペースなど子どもたちの活動を広げていく上でのより良い環境条件となつてくれればと思っています。

十月のバザーでは、保護者の皆様にも使用していただきますが、今後、様々な機会にご覧頂けたらと思っています。



2F オープンスペース



1F プレイルーム



体験する喜び、驚きと感動

五年光輝組 中許竜宏

〈はじめに〉

湘南学園小学校の「総合学習」は、知識だけでなく、直接体験や具体的な活動を通して五感で学びとり、心で感じ取ることを目指しています。

国語や算数の授業を行っていく中で、子ども達から出てくる何気ないつぶやき。そのつぶやきをきっかけに「気づき」があり、その「気づき」が新たな発見や疑問、問題提起などにつながり、授業が大きく展開していくこともあります。外に飛び出しドッジボールをしたり、クラスの出来事について話し合いをしたり。その時の子ども達が何を求めているのかを探り、その時になくはない大切な時間として設定しています。

その中で、重要視したいことの二つが「本物」に触れることです。「本物」に触れ、それを知ること、「本物」を自分で創りたくくなります。その思いや願いが意欲的に物事を探求していく大きな力となります。このように、児童の興味、関心に基づいた活動を組み立て、学んでいくことの楽しさや喜びを十分に味わわせられるような学習が展開されています。ここでは五年生「総合学習」の実践を紹介したいと思います。

〈きつかけのつぶやき〉

「先生、マグロをもう一度食べてみたいな。」そんな三言が本マグロのかぶと焼きをするきつかけでした。マグロの頭の大きさにまずビックリ。そして、脳天部分の丸い穴を発見。マグロを引き上げる時に船上で暴れて作業員に怪我やマグロ本体にキズをつけないように気絶させた跡だと知るとまたビックリ。炎をあげながら、パチパチと焼けるマグロの香ばしいにおいと音。そして、口の中に入れた瞬間の子ども達の満面の笑み。骨をいつまでもしゃぶっている子もいました。

五年生では、社会科で水産業を学びます。遠洋漁業を学習し、自分達でマグロについて本で調べました。各クラス、マグロがどれくらい大きいのか実物を作りました。桃李組は、模造紙に原寸大のマグロ6種類を描きました。ひれの大きさや色にこだわりました。暁組は、3Dで原寸大マグロを作りました。乗っても壊れない丈夫なマグロでクラスのマスコットの存在になりました。最後に制作した光輝組は、はえ縄漁船の船尾を作り、そこから教室いっぽうにはえ縄を張り何本もの針を作りました。そして、教室前方の壁からマグロの原寸大頭をはえ縄に掛からせました。自分達で調べた内容を各クラスの表現方法で造形しました。

学習はそれだけでは終わらず、三崎漁港の見学に出かけました。実際に本物のマグロがセリにかけられていました。見たこと、聞いたことに驚き、市場の空気を感じました。マグロを制作したことより身近なものとなり、感じたことすべてが学習となりました。そして、最後のマグロのかぶと焼きにつながります。

〈お米の学習〉

藤沢市で1980年から有機農業を始められた相原農園の相原さんのお力をお借りして、お米を育てています。「米作り」で、教科書に書かれている農家の仕事を体験していきます。田んぼが少し離れている場所にあるので、じっくりと観察できるようにペットボトルに自分だけの稲も植えました。田んぼの中に入って感じる泥の感覚、苗を植える時の工夫、田んぼにいる生き物達。まさに五感を通しての学習となっています。そして、相原さんとの出会い。相原さんという人物を通して伝わる農業の厳しさと食べ物への愛情、そして「命」の大切さ。作業をする子ども達の目は真剣で、流れ落ちる汗は、本当に爽やかに映ります。

〈体験する喜び、驚きと感動〉

体験を通じた学習は、知識の習得

だけではなく習得する過程を通して学びたい意欲や態度、学び方を培います。そして、体験は、発見の喜びを知り、達成した時の感動を与え、時には残念な結果を目にすることもあります。しかし、そのすべてが豊かな心情を育てます。実際に体験し、本物に触れることから生じる喜びや感動は計り知れませんが、このような生きた体験こそが、湘南学園小学校が目指す「人間力」を育てるのではないかと考えています。

「先生、お米を鳥から守らなきゃ！」自分達で植えた稲を守るため、また子ども達の試行錯誤が始まっています。



## 「相談室に足を運んでみませんか?」

スクールカウンセラー 山下直樹

スクールカウンセラーって、どんな仕事をするの?」

SCってどんな仕事をすると思われませんか? 大雑把にいうと次の4つの仕事をします。①子どもへのカウンセリング、②保護者の方へのカウンセリング、③先生方との話し合い、④地域の専門機関との連携、です。ここでは、ある架空の子どもについて例をあげながら、お話したいと思えます。

目をパチパチするりゅうへいくんのこと

りゅうへいくんは小学一年生の男の子です。夏休み明けのある朝、突然りゅうへいくんは「学校へ行きたくない」と家で泣きながら訴えました。どうしたものかとお母さんは思いましたが、ちよつと無理してでも登校させようと思いました。けれども、りゅうへいくんはどうしても動こうとしません。そんなことが1週間続きましたから、困ったお母さんが担任に相談し、担任の勧めでお母さんは、SCである私とお話することにしました。

保護者の方へのカウンセリング

こんなときSCは、まず保護者の方からじっくりとお話をうかがいます。お母さんからのお話によると、りゅうへいくんは「こ1カ月ほど、目をパチパチとするようになったそうです。そしておしつへ行く回数も増えているといえます。私は、「いつから、どのような経緯で症状が出始めたのか?」「今後保護者の方がりゅうへいくんにどのようなってほしいのか?」「など、いろいろな角度からお話をうかがってりゅうへいくんを理解していきます。保護者の方の言葉を途中でさえぎったりすることはありませんから、どうぞご自由に思いをお話しいただけたらと思います。実は思いを自由に話すという体験は少ないものです。カウンセリングでは保護者の方の揺れ動く感情や否定したい思いなどにも寄り添いながらお話をうかがいますから、繰り返しのお話をうかがううちに、複雑にからみあった感情が次第にほぐれてくることかと思えます。そのようにして信頼関係を築いたうえで、保護者の方には「ご家庭でいかに子ども

もと関わっていけばいいのか、具体的に提案します。

先生方との話し合い

保護者の方が希望するときは、カウンセリングでお聞きした内容を担任と共有し、子どもへの理解を深めていきます。りゅうへいくんの学校での様子はどうか? 目のパチパチや頻尿は学校でもみられたか? 他に何か気になることはあるかどうか? など先生方と状況を共有することは重要な課題になります。

子どもに何か問題が生じたとき、親は子どもと、子どもは親と向き合う必要が生じてきます。同じように、担任も子どもや保護者の方と向き合って話す必要が生じてくるのです。互いに向き合うことは、必ずしもスムーズに成し遂げられるわけではなく、向き合えないまま非難しあったり不満を感じたりして、バラバラになったままつながっていないことがあります。SCは「こうした関係の「学校内外のつなぎ的存在」です。理解することが難しい出来事や、苦手意識を感じることに対して、SCは支えながら見守っていく存在です。

りゅうへいくんはその後…

あれだけ泣いて登校を嫌がったりりゅうへいくん。SCとお母さん、担任と

の話し合いで、少し様子を見守るという方針を立てました。早寝と早起き、食事の時間に気をつけて、そして平日の夕方や休日は家族でゆったりと過ごすことをお勧めしました。しばらくすると彼はけろつとして登校を始めました。目のパチパチや頻尿もおさまりつつあります。どんなことでも特効薬や魔法はありません。保護者の方を中心に「ああでもない、こうでもない」と考え、苦悩することです。事は前進していくようです。

相談室に足を運んでみませんか?

もちろん、相談室で話されたことはすべて先生方と共有されるわけではありません。話してほしくないなという内容は、相談室のみで他に伝わることはありません。ですから子どもが気になるときは、かかりではなく、ご自身のこと、他のご家族について、なんでも結構です。相談室でお話になりませんか? 今年度は合計3人でカウンセリングを担当いたします。湘南学園のみなさんがより安心して、学校生活を送ることができるよう、私たちSCは相談室でみなさんをお待ちしております。

# 中高の防災対策について

教頭 柳下誠一

昨年まで実施していた防災対策の一貫としての避難訓練は、主に火災・地震を想定し、各教室から指定の経路を通りアリーナ1階フロアーに全員避難しました。しかし、3月11日の東日本大震災に伴う大津波が被災状況を更に大きく影響し、大災害となつてしまいました。今回の大震災を教訓として、今後直接の影響が懸念される「南関東地震」に焦点を当てて、行うべき各種防災対策を追求していきます。

関東大震災クラスの巨大地震が、南関東の全域に方が「勃発すると、市内は「液状化の被害」「地震津波」「道路被害」等がどうなるかを、藤沢市防災対策協議会が詳しく予想しています。特に津波については、その襲来地点も具体的に想定され、全域の予想を踏まえ、藤沢市・津波ハザードマップ」も公開されました。

湘南学園は、海岸から直線距離で約12Km、海拔6.5mに位置し、その津波による浸水域に全く入っていません。また、本校の立地条件を考えた時には、片瀬海岸に約3mの防波堤があり、海岸と学園の間を走る小田急江ノ島線が一段と高く防波堤の役割を果たすことも、詳しく関係者から指摘されています。

このようなことを踏まえ学園では、防災対策をから見直し、改善を図って行く事が最も重要と考え、検討してまいりました。津波の襲来を踏まえた津波警報の発令に際しては、避難場所を各校舎の3階以上の高い場所に避難することが、生徒の安全確保に繋がります。様々な情報を参考にしますが、自然の力は想定を大きく超えた災害になることも今回の災害で知りました。判断力や機転を養うための訓練をあらゆる場面を想定し、実施していくことが今後の大きな課題と考えています。

今回の避難訓練は、7月5日(火)3校時の授業中に大地震が起き、藤沢市内に大津波警報が発令されたことと仮定し、大津波による被害から生徒の安全を確保する為の訓練を実施しました。方法としては、クラス・テクノ・メディア・センターの各エリア3・4階の教室や廊下・スクエアにて、授業を行っている各エリアの1階・2階・アリーナやグラウンドの体育など授業中の生徒を、各授業担当者が、誘導して避難するという訓練でした。

授業担当者は、専任教師と非常勤講師の先生方にもご協力をお願いし、授業場所から避難場所へ移動

し、待機するというものでした。安全を第一に考えると共に敏速な行動と互いに協力し合い、助け合って行動することを目的としました。そして、待機場所に避難完了した後、正確な人数の確認をすることでした。この訓練は、生徒達だけでなく、教職員の訓練でもありました。

移動の順番は、大津波警報発令後1階の教室や体育の授業から移動開始し、3分後に2階の教室が、決められた経路を通り、3・4階の避難待機場所へ混乱なく移動するというものでした。

移動開始から全員の避難完了までの所要時間は6分間、授業担当者による点呼確認・報告までの所要時間が2分間、従って、合計9分間で避難開始から全員の安全確認まで行うことができました。

今回初めて津波を想定した避難訓練を実施しましたが、中学1年生から高校3年生までの生徒諸君も、東日本大震災の教訓を踏まえ、真剣に誘導指示に従って行動していました。こうした訓練を繰り返すことで、いつどこで起きるか分からない災害や事故に対して、各自がその場の対応能力を身につけることにも繋がると考えています。如何なることが起こった時も、「自分の身は自分で守る」より冷静で的確な判断の下、互いに助け合う」といった精神を学び、今後様々な場面でも、冷静かつ沈着に判

断し、的確な行動を取ることができ人間に成長して欲しいと願っています。

3月11日の当日は、部活動を行っていた生徒約100名が、教職員や近隣住民の方々と共に、一夜を過ごしました。緊急避難時に必要な防災関連の用具等の準備については、様々な不備や補充について確認することが出来ました。全学を挙げて必要な物品の充当を急ぎ、万に備えるよう追加購入していきたいと思えます。

災害用防災用具として、新たに購入した用具は以下の物品です。

防災用備蓄毛布・コンパクトプランケット・非常用トイレ・救急用品セット・懐中電灯・特定小電力トランシーバー・放射能測定器・緊急地震速報器

## 節電についての中高の取り組み

現在中高では、電気の無駄遣いを極力減らす努力をしています。廊下の照明は消す、教室内の温度は室温計の数値が27度となるように冷房を調節する。教室・特別教室・アリーナ等を使用しない時は照明や冷房を消す、といった節電努力を実践し、電力不足を補う小さな努力を積み重ねています。

今後夏場だけでなく、年間を通して冷暖房、照明等の節電は、学校全体で取り組みたいと思っています。

中高の総合学習

近年の新たな実践より

教務主任 服部基樹

現行の学習指導要領とともに、他の学校でも始まった総合学習ですが、湘南学園の中学高校では24年も前から、系統的に取り組んで来ています。クラス活動や学校行事も含めた校外教育の全体をまとめてカリキュラムを整え「特別教育活動(特活)」と総称しています。

この特活では、集団活動を基本にメンバーシップとリーダーシップを養います。発達段階を考慮した6年間のテーマを元に、社会に生きる人々から直接に学ぶ機会を豊かに設け、広く世の中や文化について考える場面を設けます。人生の必須テーマ、現代社会人類の抱える重要テーマを学び、問題意識と認識を豊かにしていきます。大学生、社会人となってからも生き生きと学び続け、主体的な人生を築いて行かれるように、高い知力を養う教育を追求しています。

各学年のテーマ・主な活動内容は以下のようになっています。

- ・ 中学1年
  - ・ テーマ
    - さまざまなるハンディキャップを持つ

人達と交流し、その生活と願いを知ります。

・ 活動内容

「生命の誕生」聞き取り作文、ブラインドウオーク、特別支援学校や高齢者施設訪問、障がい者スポーツといった体験学習。

・ 中学2年

生活圏におけるさまざまな産業や地域文化を知り、そこで働き暮らす人々の生き方や協力から学びます。

・ 湘南地域の農業、漁業、県内各地の地元商店街や観光地、開発から地域の自然を守る取り組みといったクラス単位の体験学習。

・ 中学3年

・ 日本の諸地域におけるさまざまな問題や地域文化を知り、そこで暮らし働く人々の取り組みから学びます。

・ 東京都区内で分散フィールドワーク(FW)。広島平和学習、中国瀬戸内方面への研修旅行(交流・体験学習)。

・ 高校1年

・ 社会の現実を目を広げ、生命の尊さをおびやかす諸問題を探り、人間の尊厳を大切にすることのあり方について考えます。

・ 愛と性、社会福祉・人権・環境とエネルギー等から事前学習。諸テーマに分散して自由FW。

・ 高校2年

・ 国際的な環境問題等に注目し、その背景やさまざまな立場を探り、異文化への認識を深め、相互協力や問題解決の方法を考えます。

・ 官公庁・大学・NGO・市民団体等へのFW。国内4〜5方面に分散し、民泊も追求する研修旅行。

・ 高校3年

・ 社会の諸分野を支えている人々の生き方に学び、これからの時代の中でどう自分を生かし、どう社会に寄与して行かれるか、問題意識を深めます。

・ 各界職業人や大学生OBを招いてのテーマ別座談会。

この間、毎年度末には教員間の実践報告会を開いて、全体の共有財産として次年度へと継承し、必要に応じて内容の修正も行って来ました。また、毎年の各学年の工夫と努力によって、新しい創造的な取り組みも試みられています。

以下に、近年の新たな取り組みをご紹介します。

中3の研修旅行では、これまでは4泊とも村の施設であったり、一般の宿泊施設でした。2年前からは高校2年と同様に、山口県の周防大島に入り、学年全員が2〜3人に分かれて農家に宿泊し、農作業体験を行う

という「民泊」が行われています。昨年からは民泊が2泊となり、ご家庭の方との触れ合い、作業体験も充実したものになっています。

高2では、毎年、国際的な諸問題の中からのテーマ設定やFWの訪問先探しに苦慮していました。昨年からは全体のテーマを「世界と人類が抱える課題」とし、各班のテーマは国連で合意された「MDGs(国連ミレニアム開発目標)」から選ぶこととしました。これによりテーマと目標、訪問先も明確になるという効果が出ています。

高3では、毎年各界で活躍する職業人の方々をお招きしていました。今年には「10年後の自分を考えてみよう」という視点で、28歳になった本校の卒業生を招き、話をしてもらいました。自分の10年後と重ねてより積極的に将来を見据えることができました。

生徒達は、関係する方々とアポ取りを行ったり、学んだ後にはレポート化し発表するといった課題に当たります。情報化の流れとともに、訪問先のネットでの検索が一般化しています。発表も情報の授業で学んだパワーポイント(PP)を早速駆使するなど、プレゼンテーションスキルも高まっています。今年の中3・中2でもPPを使ったプレゼン、中1では発表内容をまとめ、新聞紙面を作成する活動にも取り組まします。

# この春の大学合格結果と今後の重点課題

学習進学指導主任 野々内治男

たいへん遅くなりましたがこの春の大学の合格結果をご報告申し上げます。

卒業生二九七名に対して、大学(準大学も含む)に進学した生徒は二四七名でした。また、短大には二名、専門学校には九名の生徒が進学しました。したがって、全てを合わせると、現役進学率は八〇・二%ということになります。なお、文系と理系の進学率の差はほとんどありませんでした。

近年は、「文低理高」などと言われ、理系の人気が高まっています。二コースでも報じられているように、ただ大学を卒業したというだけでは、就職が難しくなっています。そのため、大学では技術を身に付けたり、資格を取得するために、理系に進学しようと考えている人が多くなるわけです。そのように理系志望者が増えつつある中、湘南学園の理系諸君は、ほんとうによく頑張ってくれました。国立大学には十名の生徒が合格し、進学しました。特筆すべきは、この十名の合格進学者のうち、三名がいわゆる普通クラスの生徒だったという点でしょう。最後まで高い目標を掲げて、あきらめずに勉強し続ければ、道は開けるといふことなのでしょう。私立大学においても、早慶上理の最難関

大学を始めとして、それに準じるMARCDHと呼ばれる難関大学にも、合わせて四十三名の合格者が出ました。また、これら以外では、最難関医科大学である自治医大の合格者が出たことも、大きなニュースです。この大学への合格は、湘南学園では過去なかったと思いますが、そのような前例を覆しての合格でした。今後、これに続く後輩諸君が現われることを期待しています。理系のことばかりを記してまいりましたが、もちろん文系の諸君もよく頑張ってくれたと思います。そのため、この春の大学合格の結果は、全体としてはまずまずのものとなったと思います。

ただ細かく見ていくと、まだ不十分な点もあることは事実です。たとえば、文系生徒の国公立志望者の数は決して多いとは言えません。これをどのようにして増やしていくか、その方策を講じなければなりません。また、MARCDHレベルの大学の合格者数を増やすために、成績中堅層の生徒たちをどのように引き上げていくかも考える必要があります。いずれも簡単に解決できることではありませんが、着実に進展させていきたいと考えています。

そのために、現在、学習進学指導委員会でご検討していることを紹介申

し上げます。まず一つめは、中学生の家庭学習の充実をどのように図るかという点です。学校の授業を大切にするとともに、家庭学習を毎日きちんと行うことによつて、学力は向上させられるのだと思います。ところが、中学生の家庭での学習時間を調査してみますと、あまりに学習に取り組む時間が少ないことが分かります。現在も、学年や教科担当者が個別に対策を講じていますが、これは中高の教員全体で取り組んでいかなければならない重要課題であると考えています。二つめは、中学高校を通しての進路指導プログラムをどのように組み立てるかという点です。これは、昨年度からの引き続きの課題ですが、今年度中の完成を目指して、現在、具体的な作業に入っています。この進路指導プログラムによつて、生徒諸君が自らの進路について真剣に考えるときともに、意欲的に学習に取り組んでいくことができるようになれば、切に願っています。

中・高では、これまで大学合格実績の向上を目指して、さまざまな改革を行ってまいりました。今後この動きを止めることなく、さらなる前進を図りたいと考えております。

## 主要大学合格実績 (現役・浪人)

【国公立大学】

- 東北大 (1・0)
- 筑波大 (2・0)
- 千葉大 (1・0)
- 東京大 (1・1)
- 東京工業大 (1・0)
- 東京農工大 (1・0)
- 横浜国立大 (1・0)
- 島根大 (1・0)
- 首都大東京 (1・1)
- 神奈川県立保健福祉大 (1・0)
- 横浜市立大 (1・1)

【私立大学】

- 早稲田大 (7・2)
- 慶応義塾大 (4・2)
- 上智大 (5・3)
- 東京理科大 (9・2)
- 学習院大 (3・1)
- 明治大 (12・4)
- 青山学院大 (9・5)
- 立教大 (3・0)
- 中央大 (9・1)
- 法政大 (13・4)
- 成城大 (8・2)
- 成蹊大 (5・1)
- 明治学院大 (5・2)

【医歯薬系大学】

- 医学系大 (4・4)
- 歯学系大 (3・0)
- 薬学系大 (13・1)

※詳細なデータは、学園ホームページをご覧ください。

# 理事会、新規に2つの80周年記念事業を決定

## さらさらに楽しく豊かなキャンパスライフへ！

理事会は、8月末までに、創立80周年記念事業（以下「記念事業」として、これまでの小学校改築事業に加えて、新たに2つの事業を決定しました。これは、創立80周年実行委員会（以下「実行委員会」という）から、80周年記念事業の決定は、財政問題もあることから、理事会で決定してほしいとの要請を受けて検討してきたものです。

そのひとつは、カフェテリア（食堂）と史料室・同窓会室を兼ね備えた「80周年記念館（仮称）」を建設するというものであり、もうひとつは、優れた人材を迎え励ますための「育英制度（仮称）」を創設しようというものです。いずれもまだ具体化はこれからですが、これを受けて、今後各団体・各パートの要望などもふまえて、「実行委員会」でもその具体化に向けて検討していくことになりました。

### その1「80周年記念館」(仮称) (1)カフェテリア(食堂)の新設

「80周年記念館」の中心施設となるカフェテリアは、湘南学園のキャンパスライフを一段と楽しく豊かなものにし、各パートの諸活動を活性化させていくうえでも一大拠点となるものです。

「80周年記念館」のコンセプトや建設場所や建設費用等は、これから検討が始まります。

### キャンパスライフに広がる夢

○ 中高生にとって、昼休みには友だちと一緒に楽しく食事・談笑できる場があったらなあ。

○ 出すものにこだわった食育の場がほしい。

○ 学園祭などでは来場者のための食堂として使えるといい。

○ 長期休暇中の部活動等や卒業生の同期会等にもさまざまな形で利用できたらなあ。

○ 小学校や幼稚園の食育給食にも

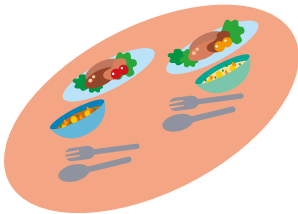
活用できる。

○ PTAや同窓会・後援会などの様々な懇親会などにも利用できたらなあ。

○ 鶴沼地域の人々にも開き、地域との交流を広げたい。

○ 視聴覚機器を備えれば、第二中高ホールとして教育活動に利用できるものに。

○ 学園生活にうるおいを与え、生徒募集にも大変強力な宣伝材料となるものに。



### 「80周年記念館」(仮称) (2)史料室・同窓会室の新設

「80周年記念館」のもうひとつの施設となる史料室・同窓会室は、学園の史料を収集・整理・保存するとともに、同窓会の活動拠点としての同窓会室をもうけようというものです。

### 史料室―湘南学園の過去を知り、未来を拓くために

○ 今、湘南学園のルーツをたどり、建学の精神や歴史をたどり、その教訓を学びとりつつアイデンティティを確立していくことが必要になっている。

○ とくに湘南学園の場合は、保護者と教職員による共同経営という日本の私学の中でも独特の経営方法をとってきた学園ですから、その歴史はとりわけ重要な意味をもっている。

○ 現在、戦前からの貴重な資料は、各パートに散在している状態で、保存状態も悪く、このままではそれらが散逸してしまう恐れがある。

○ 鶴沼公民館において藤沢市の歴史資料を整理編纂されてきた同窓生の内藤喜嗣氏が、湘南学園についての多数の貴重な資料を学園に対して寄贈したいとの申し出を受けている。

同窓会室―チーム湘南学園の牽引車となつて活動する同窓会



○同窓会室は、一万数千人の卒業生がその絆を大切に交流し、いつまでも母校を愛していただくための活動拠点となる。

○同窓会は、80周年プレ企画として森稔氏や鈴木健次氏の講演会を取り組む中で、湘南学園・同窓会・PTA・後援会がチーム湘南学園として連携を強めていく牽引車の役割も果たしている。

○学園が呼びかけた3・11東日本大震災被災者支援募金に同窓会として50万円を寄付。

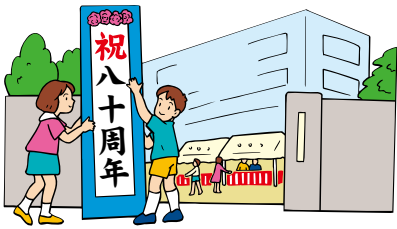
○幼稚園や小学校が募集困難に直面している中で、約一万人の同窓生に向けて年1回発行する同窓会誌「SEASIDE」の発送の際に、募集案内を同封し、同窓生にお子さんやお孫さん・お知り合いのお子さんの入園・入学を呼びかけていただいた。

その2 優秀な人材を迎え励ます 育英制度の創設

湘南学園では、今春、2名が東大合格し、また国公立大学や難関私立や医学部等へも多数進学しました。一部週刊誌では例年、東大進学校の紹介をしており、湘南学園もその中に名を連ねました。

きびしい募集競争の中で、進学実績を上げていくためにはできるだけ優秀な人材に入学してもらえらるような環境づくりが必要です。そのひとつとして、80周年を記念して、同窓会ははじめ学園関係者に訴えて育英制度を創設しようとするものです。

なお、この育英制度の基金については、母校の教育のためにご賛同・ご協力いただける大口の寄付者を募つていくことにしています。



<参考>県立A高校の育英制度の概要(創設2年目)

- 育英制度 ○○○○は寄付者名
- ・対象者 東大に合格したもので学費支弁が困難な者
  - ・奨学金 一人当たり50万円(最大100万円)
  - ・対象者数 10名/年
  - ・実施期間 10年

記念式典は創立記念日

2013年11月15日(金)と決定

―創立80周年に向けて動き出した

4分野の委員会―

9月7日の常任委員会の提案を受けて、9月17日の実行委員会では、各パート・団体が足並みを揃えられる日として、創立80周年記念式典を2013年11月15日(創立記念日)と決定し、4分野の委員会がこ

れまでの議論をふまえてそれぞれの分野の具体的な内容の検討を開始しました。

委員会は次の4つです。

実行委員長 高尾理事長

全体の統括

副実行委員長 仲本学園長

全体の統括

・行事委員会11名

(委員長 斉木小学校校長、副委員長 榎本・前川・斉藤・田辺各氏他6名)

・記念誌委員会11名

(委員長 山田中高校長、副委員長 田辺氏他9名)

・事業委員会13名

(委員長 仲本学園長、副委員長 田中・辻・北村各氏他9名)

・募金委員会14名

(委員長 高木副理事長、副委員長 辻・渡辺・佐藤・富田・北村各氏他8名)

学校法人から

【理事會報告】

センターエリア3階中会議室

- 第1回定例理事會 4月23日
- 第1回臨時理事會 5月14日
- 第2回定例理事會 5月28日
- 第3回定例理事會 6月25日
- 第4回定例理事會 7月16日
- 第5回定例理事會 8月27日

〔主な議題〕

- ・平成22年度事業報告について
- ・平成22年度決算報告について
- ・広報活動の実施状況について
- ・80周年記念事業について
- ・学園だよりの発行について
- ・防災用具の購入について
- ・労務交渉について
- ・放射能モニタリング調査について
- ・東日本大震災義援金について
- ・全学教育研究集會について
- ・次学期園長の選任について

【評議員會報告】

センターエリア3階大会議室  
第1回評議員會 5月28日

〔主な議題〕

- ・校（園）長理事の選任
- ・平成22年度事業報告
- ・平成22年度決算報告



東日本大震災に関連して

①放射線量の測定について

東日本大震災に伴う原発事故により放射能が広範囲に拡散し大きな問題となっているのは改めて申すまでもありませんが、当学園の放射能対策の一環として6月25日、7月6日、7月7日の3回、校地各所の放射線量を測定いたしました。

その結果、プール水、土壤等のヨウ素・セシウムは不検出であり、空間線量も幼稚園地域では0.04〜0.07マイクログローベルト/時、小学校地域では0.04〜0.08マイクログローベルト/時、中高地域では0.03〜0.06マイクログローベルト/時、本部棟前の排水溝付近ではやや高く0.12〜0.15マイクログローベルト/時でありました。

一般公衆が一年間にさらされるよい人工放射線の限度が1ミリシーベルト（1千マイクログローベルト）という国際放射線防護委員會の基準に対し、文部科学省や多くの自治体が定めた暫定基準値は、一時間あたりの線量に換算して0.19マイクログローベルト/時であります。学園における測定結果はこの基準値以下ですので、健康への影響は心配する必要のないことが確認できました。

②災害時の避難施設について

学園は藤沢市との協定により、災害発生時に被災者の避難施設として体育館を提供することになっております。3月11日16時過ぎ、藤沢市は湘南海岸への津波の襲来に備え、当学園に避難施設の開設を要請してまいりました。

今回は津波対応であるため、協定に定める体育館ではなく、アリーナ棟3階の大会議室、中会議室、スタジオを主たる避難場所に、一階ロビー及び事務応接室を予備的な避難場所として準備しました。使用区分として3階部分は人のみとし、一階部分はベット及び飼いの主用としました。やがて市役所の避難施設従事職員や近隣住民が学園に集まり始め、避難者の掌握のため、事務室に設置した避難者名簿に住所・氏名の記入をお願いしました。名簿によれば避難者は最大時で281名、その内宿泊者は約70名を数えました。学園長と事務局職員は、開設から閉鎖まで避難者の対応に当たりました。7名（全員男性）が事務室等に残留しました。

一方、地震の発生は14時46分で、児童・生徒の下校にも影響し、小学校では深夜1時ごろ最後の児童が親に引き取られました。教諭6名が教員室等に残留しました。中高においては生徒96名が帰宅できず、男子は図書室、女子はメディア室に宿泊し、教員は43名が教員室等に残留しました。生徒は翌朝教員の引率で

藤沢駅まで徒歩で下校しました。3月12日14時37分、藤沢市から避難施設の指定を解除すると連絡が入り、これをもって避難施設の運営を終了しました。

③義援金について

東日本大震災の被災者に対して当学園も義援金を贈ることとし、児童・生徒、保護者あるいは同窓会等関係各位に募金をお願いしましたところ、幼・小・中高関係者、湘南学園教職員親睦会、湘南学園後援会及び湘南学園同窓会等から募金をいただき、その合計額が8月20日現在で2百73万6千336円に達しました。これを湘南学園幼・小・中高の名義で、それぞれの公的関係機関を通じて被災地域の主として学校関係への義援金として送金いたしました。皆様の心暖まるご支援に対し厚く御礼申し上げますとともに、今後ともご協力を賜りますようお願い申し上げます。

④PTA寄付金について

PTAから防災用品購入資金として400万円が寄付されました。主な物品として、コンパクトブラシケット2000個、毛布400枚、LED懐中電灯30個、非常用トイレ1000回分、カローリーメイト2000個、水(500ml)2000本などです。PTA保護者皆様のご厚意に心から感謝申し上げます。